

Title	蒔絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』
Sub Title	
Author	石田, 礼以菜(Ishida, Reina)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	三田國文 No.66 (2021. 12) ,p.54- 66
JaLC DOI	10.14991/002.20211200-0054
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20211200-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蒔絵師源三郎と『人倫訓蒙図彙』

石田 礼以菜

一、はじめに

蒔絵師源三郎は、江戸時代前期の京都の蒔絵師であり、版本の挿絵を描いた絵師である。元禄三年（一六九〇年）刊『人倫訓蒙図彙』（吉田半兵衛・蒔絵師源三郎画）の第三巻末尾に「蒔絵師源三郎筆」と署名があることからその名が知られており、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）では、江戸時代前期の京都の絵師である、吉田半兵衛の門人の一人とされている。^①吉田半兵衛は、貞享三年（一六八六年）刊『好色訓蒙図彙』、貞享四年（一六八七年）刊『女用訓蒙図彙』などに署名があることからその名が知られており、貞享三年（一六八六年）刊『好色一代女』『好色五人女』、貞享四年（一六八七年）刊『男色大鑑』などの井原西鶴の作品の挿絵を描いたともされている。^②吉田半兵衛は、その他にも多くの作家と関わりがあるので、江戸時代前期の出版界を知る上で重要な人物であるといえる。吉田半兵衛については、拙稿「絵師吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号（慶應義塾大学文学会 二〇一八年二月）に詳しく述べている。

蒔絵師源三郎についての主な先行研究は、近代までの先行研究を概括した、雨石齋主人「吉田半兵衛と蒔絵師源三郎」『浮世絵』第五一号（浮世絵社 一九一九年十二月）、蒔絵師源三郎の経歴と作品について考察した『古版小説挿画史』などであるが、それ以降、蒔絵師源三郎に関する研究はほとんど進んでおらず、後述するように、先行研究にはいくつかの問題点があると考えられる。そこで、本稿では、蒔絵師源三郎の経歴と作品について、改めて検討してみたい。

二、蒔絵師源三郎の経歴

蒔絵師源三郎の詳細については不明であり、水谷不倒氏が『古版小説挿画史』で考察しているのみである。以下に、『古版小説挿画史』「蒔絵師源三郎」項の一部を引用する。

源三郎の経歴は、半兵衛よりも、更に判らない。新井白石の『退私録』に、南都の天蓋といふ所に、塗師屋源三郎といふ者があつて、徐熙筆鷲の絵を所持してゐたことが記してある。これによつて、源三郎は奈良の人といふことを知るのみである。

ここで水谷不倒氏が蒔絵師源三郎の経歴を知る手掛かりとして挙げているのは、明暦三年（一六五七年）〜享保一〇年（一七二五年）の政治家である新井白石が著した、『退私録』上巻「珠光之事」である。以下に、その部分を引用する。

一茶の湯に名ありし珠光は浄土宗にて永観堂の末寺にて南都の称名寺の住僧なりしより仰あり天蓋と云所に塗師屋源三郎と云者あり其家に珠光が所持せし徐熙が鷲の画あり見侍りし由仰す

このように、水谷不倒氏が『古版小説挿画史』で、蒔絵師源三郎は「奈良の人」であるとしたことから、現在では、蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるということが通説になっているが、筆者が改めて塗師屋源三郎という人物について確認したところ、水谷不倒氏が参照した『退私録』にある塗師屋源三郎とは、松屋久重（通称は塗師屋源三郎。江戸時代前期に奈良の転害郷（現在の奈良県奈良市手貝町）に住んでいた漆器商人。室町時代の僧である村田珠光の茶道を継承し、珠光が好んだ徐熙の鷲の絵を所持していた。）のことなので、蒔絵師源三郎とは別人であることが判明した。なお、塗師屋源三郎については、『神谷宗湛日記』天正一五年（一五八七年）三月二十七日条にも以下のような記事があり、このことから、蒔絵師源三郎よりも前の時代に生きていた人物であり、蒔絵師源三郎とは別人であることが分かる。

一塗や源三郎御会。奈良にて。宗湛。四畳半。六尺床に白鷲の絵始終掛て。（中略）絵の事。絹の内堅三尺四五寸。

横一尺六七寸。白鷲二ツ。蓮葉二ツ。印三ツ有。内二ツは

左の方に上下に有。同下之印そと大也。右の上に一ツ。皆一寸三分程の印也。上下茶。中風帯小紋濃淺黄の緞子。露紫也。一文じなし。はち軸くはりん。筆者徐熙也。

以上のことから、蒔絵師源三郎の経歴については、現在のところ、やはり詳細は不明ということになる。ただし、『人倫訓蒙図彙』の刊記に「書林 平楽寺 開板」とあることから、蒔絵師源三郎は、奈良ではなく、京都の書肆である平楽寺の近くに住んでいた、京都の絵師であったということが、可能性の一つとして考えられる。

三、『人倫訓蒙図彙』の挿絵を描いた絵師について

『人倫訓蒙図彙』は、江戸時代の職業について図解した事典で、全七巻である。その第三巻末尾に蒔絵師源三郎の署名があり、第一巻・第二巻と第三巻〜第七巻では挿絵の画風が異なるので、現在、『人倫訓蒙図彙』の挿絵を描いた絵師については、以下の二通りの説が存在する。

A 第一巻・第二巻は蒔絵師源三郎画、第三巻〜第七巻は別人画とする説

B 第一巻・第二巻は別人（吉田半兵衛）画、第三巻〜第七巻は蒔絵師源三郎画とする説

以下に、それぞれの説を引用する。まず、A説の、第一巻・第二巻は蒔絵師源三郎画、第三巻〜第七巻は別人画とする説は、水谷不倒氏の『浮世草子 西鶴本』（水谷文庫 一九二〇年）上巻「〔五〕西鶴本の挿絵に就て」における説である。

蒔絵師源三郎の筆意といふはどんなものを指すか。(中略)『類考』の提供してをる『人倫訓蒙図彙』に就ても、実は其筆者に不明な点があつて、自信がないのである。原来此書を源三郎の絵と称するのは、三の巻の終りに「蒔絵師源三郎筆」と刻してあるに起因してある事はいふまでもないが、同書の絵は、一二の巻二冊と三四五六の巻四冊とは、全然筆意が異なつてをり、どうしても二人の画工によつて画かれたものである事が窺はれる。然れば源三郎はどちらの方を画いたかといふに、当然名の刻してある三の巻以下を画いてをるやうに思はれるけれど、事實は之に反し、一二巻の方が源三郎の筆で、三四巻以下は別人であると思はれる。然れば何故に二の巻の終りに源三郎の名を入れなかつたのか、又何故に他人の画いた三の巻にわざと源三郎の名を入れたか、斯う穿鑿立をして来るといよく、迷宮に入らざるばかりである。或は『人倫訓蒙図彙』には、源三郎の名のないものがあつて、名のあるものは後摺でないかといふ説もあるが、流布本は大概在名のもので、其原版本といふものをまだ見た事がないから、其疑ひを解く事が出来ぬ。しかし同書中源三郎が画いたものありとすれば、『類考』はじめ一二の巻の絵を源三郎の筆と認める人が多いやうであるから、こゝには其説に従つて一二の巻を源三郎の筆意と仮定する。

一方、B説の、第一巻・第二巻は別人(吉田半兵衛)画、第三巻〜第七巻は蒔絵師源三郎画とする説は、井上和雄氏の『浮世絵師伝』(渡辺版画店 一九三一年)と漆山又四郎氏の、日

本書誌学大系34(1)『絵本年表』第一巻(青裳堂書店 一九八三年)における説である。まず、井上和雄氏の『浮世絵師伝』「源三郎」項では、

源三郎 【生】 【歿】
【画系】 【作画期】元禄

奈良の人、蒔絵師なり、元禄三年七月版『人倫訓蒙図彙』(版元、京都村上平楽寺)七冊の内、卷三以下(卷一及び卷二は別人の筆)の五冊を画けり、蓋し、卷三の終りに「蒔絵師源三郎筆」とあるを以て、彼が名を知らるれども、其が画風は頗る稚氣を帯び、画系の如きは全く不明なり。また元禄八年版(舎衣軒作)の『好色十二人男』五冊も彼の挿画なりと云ふ。

と、第一巻・第二巻は別人画、第三巻〜第七巻は蒔絵師源三郎画であるとしている。次に、漆山又四郎氏の、日本書誌学大系34(1)『絵本年表』第一巻「元禄三年」項では、

人倫訓蒙図会 半紙本七卷百四十二丁半 元禄三庚午載七月吉旦

蒔絵師源三郎画 三、四、五、六、七ノ巻(三卷末に署名あり) 書林平楽寺開板
序 署名なし

○但シ一、二ノ巻ハ吉田半兵衛風ノ画也 大坂高麗橋一丁目 村上清三郎・江戸日本橋南平松町 村上五郎兵衛
○天童¹¹接、住吉具慶の洛中洛外の絵巻を見るに源三郎は具慶の門人か左なくも具慶を私淑せる者なるべし、又署名なきも西鶴の好色一代男、二代男、諸国咄、近代艶隠

者、□版の撰集抄等は源三郎の画なる事疑無しとあり、第一巻・第二巻は吉田半兵衛風の画、第三巻〜第七巻は蒔絵師源三郎画であるとしている。

そこで、このA・B説のどちらが正しいかを検証するために、『人倫訓蒙図彙』の挿絵の比較を行った。すると、『人倫訓蒙図彙』第一巻・第二巻は、吉田半兵衛の画風と類似していることが分かった。例えば、『人倫訓蒙図彙』第一巻二四丁オの、尼が両手を広げながら左足を上げている絵と、『女用訓蒙図彙』(吉田半兵衛画)第三巻四丁ウの、女性が両手を広げながら左足を上げている絵が類似している。また、『人倫訓蒙図彙』第二巻一三丁ウの、鬢を結った若衆が画面左を向きながら将棋をしている絵と、『女用訓蒙図彙』第三巻一丁オの、鬢を結った女性が画面左を向きながら立っている絵が類似している。一方、『人倫訓蒙図彙』第三巻〜第七巻は、吉田半兵衛とは画風が異なっていることが分かった。例えば、『人倫訓蒙図彙』第四巻五丁オの、持遊細物屋を見物している子供は、先に吉田半兵衛の画風と類似していると指摘した『人倫訓蒙図彙』第二巻における、六丁オの、小児科医師と向き合って座っている子供と比較すると、子供が異様に小さく描かれるなど絵が稚拙である。

以上のことから、B説が正しく、私見では第一巻・第二巻は吉田半兵衛画、第三巻〜第七巻は蒔絵師源三郎画であると考えらる。

では、なぜA説が生まれたのかについて考察してみたい。水谷不倒氏は、『浮世草子 西鶴本』の、先に引用した部分にお

いて、『類考』はじめ一二の巻の絵を源三郎の筆と認める人が多いやうであるから、こゝには其説に従つて一二の巻を源三郎の筆意と仮定する。」と述べている。ここで水谷不倒氏が参照しているのは、江戸時代後期の作家である山東京伝が著した、享和二年(一八〇二年)成立『浮世絵類考追考』(蒔絵師源三郎)項である。以下に、その部分を引用する。

元禄三年刻本人倫訓蒙図彙に此名あり、西鶴が作の読本のさし絵、名を顕さずといへども多くは此人の絵なり。

『浮世絵類考追考』の作者である山東京伝は、吉田半兵衛については、『浮世絵類考追考』(当世絵又兵衛・同 半兵衛)項に、「元禄五年版買物調方三合集覧¹⁴⁾に、京にて当世絵書、丸太町西洞院古又兵衛とあり。是等も岩佐又兵衛が名を似せたるものなるべし、又是にならばせて、四条通御旅所の後半兵衛とあり、是等も京の浮世絵師なり。」とのみ述べており、京都の絵師であるということしか知らなかった。また、『浮世絵類考追考』(蒔絵師源三郎)項では、『人倫訓蒙図彙』は第一巻・第二巻と第三巻〜第七巻で画風が異なることは指摘されていないので、山東京伝は、第一巻・第二巻(私見では吉田半兵衛画)だけを見て、それを署名のある蒔絵師源三郎画と考え、「西鶴が作の読本のさし絵、名を顕さずといへども多くは此人の絵なり。」と述べたのではないか。

しかし、水谷不倒氏はそのことに気付かず、『人倫訓蒙図彙』の第一巻・第二巻と第三巻〜第七巻の挿絵を比較した際に、井原西鶴の作品によく見られる吉田半兵衛の挿絵に似た画風の、第一巻・第二巻が蒔絵師源三郎画であると考えたのではないか

と思われる。

四、蒔絵師源三郎の作品

次に、蒔絵師源三郎の作品についてである。前述の通り、蒔絵師源三郎の画風については、研究者によって異なった見解が示されており、その結果、現在、蒔絵師源三郎画でない作品についても、蒔絵師源三郎画とされているという問題点がある。

そこで、蒔絵師源三郎についての記述がある主な書籍やデータベース¹⁵⁾において、これまで蒔絵師源三郎画とされてきた作品を全て調べ、確実に蒔絵師源三郎画といえる作品を改めて整理した。すると、これまで蒔絵師源三郎画であるとされてきた作品は、延宝九年（一六八一年）刊『日蓮大聖人御伝記』、天和二年（一六八二年）刊『好色一代男』、貞享元年（一六八四年）刊『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』、貞享二年（一六八五年）刊『西鶴諸国はなし』、貞享三年（一六八六年）刊『近代艶隠者』『好色一代女』『本朝列仙伝』、貞享四年（一六八七年）刊『絵入西行撰集抄』、元禄元年（一六八八年）刊『好色文伝授』、元禄三年（一六九〇年）刊『人倫訓蒙図彙』、元禄五年（一六九二年）刊『世間胸算用』『小話 観世流百番』、元禄六年（一六九三年）刊『浮世栄花一代男』『西鶴置土産』、元禄七年（一六九四年）刊『西鶴織留』、元禄八年（一六九五年）刊『好色十式人男』『西鶴俗つれつれ』、元禄九年（一六九六年）刊『万の文反古』『古今武士鑑』、元禄一一年（一六九八年）刊『小夜嵐』『怪談全書』『新色五卷書』『初音草咄大鑑』、元禄一三年（一七〇〇年）刊『御前義経記』、元禄一五年（一七〇二年）刊

『女大名丹前能』『元禄曾我物語』『元禄大平記』『御前伽婢子』、元禄一六年（一七〇三年）刊『好色敗毒散』『新平家物語』『風流今平家』『傾城百人一首』、宝永二年（一七〇五年）刊『御伽人形』『棠大門屋敷』『傾城武道桜』、宝永三年（一七〇六年）刊『御伽百物語』『当世乙女織』、宝永四年（一七〇七年）刊『色道懺悔男』『伊達髪五人男』『昼夜用心記』『傾城播磨石』、宝永五年（一七〇八年）刊『美景蒔絵松』、宝永六年（一七〇九年）刊『御前二代曾我』、刊年不明（元禄四・五年頃）『好色にしき木』の四五作品であった。

これらの作品を改めて確認したところ、『人倫訓蒙図彙』以外で、蒔絵師源三郎の署名がある作品はなかった。また、水谷不倒氏が『浮世草子 西鶴本』において、私見では吉田半兵衛画を蒔絵師源三郎画であるとしたこともあり、『人倫訓蒙図彙』以外に、蒔絵師源三郎画であると考えられる挿絵が描かれている作品もなかった。よって、現在、蒔絵師源三郎画であることが確実な作品は、『人倫訓蒙図彙』のみであるといえる。

五、従来蒔絵師源三郎画とされていた作品の 絵師について

現在蒔絵師源三郎画とされている作品の中で、『好色一代男』『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『本朝列仙伝』『絵入西行撰集抄』の七作品は、蒔絵師源三郎の絵とは異なるものの、いずれも同じ画風であった。これは、漆山又四郎氏が、日本書誌学大系34(1)『絵本年表』第一巻の、先に引用した部分において、「○天童按、(中略)又署名なきも

西鶴の好色一代男、二代男、諸国咄、近代艶隠者、□版の撰集抄等は源三郎の画なる事疑無し」としたためである。これらの作品の挿絵には、いずれも人物の身体が曲がっていて、下半身が極端に細く描かれているという特徴がある。例えば、『好色一代男』第六卷第六図の、廊下を歩いている遊女の絵、『諸艶大鑑』第六卷第七図の、遊郭を歩いている遊女の絵、『近代艶隠者』第一卷第七図の、小さな獣を抱く女性の絵、『絵入西行撰集抄』第六卷第一四図の、扇を手に舞う遊女の絵、『俳諧女歌仙』第一図の、座っている光貞妻の絵、『西鶴諸国はなし』第二卷第七図の、首のない女性の幽霊の絵、『本朝列仙伝』第四卷第二図の、富士山の上で舞う天女の絵などである。

これについて、水谷不倒氏は、『古版小説挿画史』「蒔絵師源三郎」項で、以下のように述べている。

『蒔絵師伝』は後者に属し、三卷以下を源三郎の筆として、なほ『類考』の説を支持し、西鶴の『二代男』等、半兵衛の筆以外の挿絵を、源三郎が描いたやうに云つてゐる。之は西鶴の条に、私が考証した西鶴の挿絵に、該当するものであるから、其説の非なることは論を俟たぬ。

このように、水谷不倒氏がこれらの作品を井原西鶴画とした理由は、井原西鶴が画賛を書いた絵と画風が類似しているからである。井原西鶴の画賛については本稿では詳しくは取り上げないが、現在発見されている井原西鶴の画賛は、その本文には井原西鶴の署名があるが、絵には井原西鶴画であるという署名はないので、井原西鶴が画賛を書いた絵が、本当に井原西鶴画であるという確証はない。井原西鶴が自身の作品の挿絵を描い

ていたという説に対しては、小池藤五郎氏の『新資料による西鶴の研究』（風間書房 一九六六年）「西鶴筆の自画賛物。画技の基礎的作品」では、「核心をきわめずして、外側に雪・石・ごみ・土までもつけ」た「雪だるま」のような主張であると述べられており、信多純一氏の『好色一代男の研究』（岩波書店 二〇一〇年）「西鶴自画をめぐって」では、これまで井原西鶴画とされていた作品に対して、それぞれに疑問点を提示し、『好色一代男』他従来西鶴画とされてきたものはすべて白紙に戻し、下絵は西鶴画に違いないが、当時の専門絵師に描かせたものとして、今後論じていきたい。」と述べられているが、その後、水谷不倒氏のこの説が、再検討されることなく現在に至っている。そこで、これらの作品が本当に井原西鶴画であるかについて、再検討してみたい。

まず、現在、井原西鶴画とされている作品を整理した。『好色一代男』『俳諧女歌仙』『諸艶大鑑』『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『本朝列仙伝』『絵入西行撰集抄』と同じ画風の作品を調べたところ、『表一』に記載したような一五作品（挿絵の合計は八二二図）があった。そのうち、井原西鶴作・編の作品は七作品（挿絵の合計は二九八図）、別人作・編の作品は六作品（挿絵の合計は三二五図）、作者不明の作品は二作品（挿絵の合計は一九九図）であった。このように、別人作・編の作品があることや、挿絵の合計が八〇〇図以上に及ぶことから考えると、これらの作品が、専門絵師ではない井原西鶴画であるとはやや考えにくい。なお、作者不明の作品については、現在では、その挿絵が、水谷不倒氏が井原西鶴画とした絵と同じ画風

なので、井原西鶴作と推定されているが、もし井原西鶴画でなければ、井原西鶴とは全く関係のない作品ということになる。

次に、作品の作・编者自身が挿絵を描いていた場合、本文と挿絵の内容の違いはあまりないはずであると考えた。そこで、井原西鶴の代表作であり、天和二年（一六八二年）刊の大坂版（井原西鶴）画」と貞享元年（一六八四年）刊の江戸版（蔦川師宣画）が存在する『好色一代男』を対象とし、その本文と挿絵の内容の比較を行った結果、大坂版（井原西鶴）画の挿絵では全五四図中一一図に、【表二】に記載したような違いがあった。このことから考えても、『好色一代男』などの作品が、井原西鶴画であることについては疑問が残る。

次に、肉筆で描かれ彩色された絵巻の存在についてである。元禄五年（一六九二年）頃に制作された「西鶴独吟百韻自註絵巻」は、井原西鶴が一人で吟じた一〇〇句の連句に自分で注をつけた絵巻である。この「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵には、現在、井原西鶴画とされている版本の挿絵との類似点がある。例えば、「西鶴独吟百韻自註絵巻」第三図の、三人の若衆が、画面右を向き、笠を斜めに深く被り、右腕を後ろにして左腕を懐に入れ、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵は、

『三箇津』第二五図の、一人の若衆が、画面左を向き、笠を斜めに深く被り、右腕を懐に入れて左腕を後ろにし、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵、『好色一代男』第二巻

第六図の、一人の香具売りが、画面右を向き、笠を斜めに深く被り、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵、『俳諧石車』第四図の、一人の若衆が、画面左を向き、笠を斜めに深く

く被り、右腕を懐に入れて左腕を後ろにし、脇差を差し、供の者を連れながら歩いている絵と類似している。また、「西鶴独吟百韻自註絵巻」第七図の、一人の男性が、画面左を向き、笠を深く被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差し立っている絵は、『好色一代男』第一巻第五図の、世之助が、画面左を向き、笠を被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差し立っている絵、『難波の貞は伊勢の白粉』第二巻第四図の、一人の男性が、画面左を向き、笠を深く被り、左手に持った扇を顔にかざし、脇差を差し立っている絵と類似している。この絵巻は、水谷不倒氏が井原西鶴画とした絵と同じ画風なので、近年まで井原西鶴画であると考えられていたが、現在では、専門絵師ではない井原西鶴が絵巻を制作したとは考えにくく、専門絵師画である可能性が高いという意見もある²¹ので、もし、「西鶴独吟百韻自註絵巻」の絵を描いた人物が、先行研究で指摘されている通りに、井原西鶴ではなく専門絵師であった場合、版本の挿絵も専門絵師が描いたと考えられるのではないか。

以上、現在、井原西鶴画とされている作品について再検討したが、作品中に絵師の署名がある作品などはなく、これらの作品が井原西鶴画ではないという確証はなかった。しかし、ここからは、もし、これらの作品が井原西鶴画でなかった場合について考えてみたい。

最後に、『寛潤平家物語』における記述についてである。宝永七年（一七一〇年）刊の、平家物語に仮託した浮世草子である『寛潤平家物語』第四巻第四話「微塵も絵図に違ぬ女」に、

『好色一代男』の挿絵を描いた絵師についての記述がある。以下に、その部分を引用する。⁽²⁾

好色一代男の絵は何もの、筆なりけん、鳥原の初音もろこし、よしの夕ぎりあづまをはじめ、皆江藻髪の婆々の御影を見るがごとく、腰かゝまり袖ちいさく、鳩むね鐘おとがいにして、立すがたは大風にふかれて倒ありくに似たり、大坂の正甫は鶉一疋銀一枚にさだめて、かくれなき名をとりぬれ共、上手に二代なかりけり、されば泰羅の色盛、いまだ家の世継誕生なしとて、京にて妾あまたか、えられしに懐妊の沙汰なく、此たびは大坂にて見たて役人くんだり、姿絵を絵師にあつらへけるに、内意ありて江戸には三浦の小むらさき、京にては花崎、大坂にてはみちとせ、此三人の形をうつし絵に、似たる女をと肝煎中間人置に、図を渡して尋ねさせ、来廿一日中の鳥の屋敷にて目見ある筈にふれわたしけるに、煎場の弥兵衛方より三十七人、上町の天狗婆々が手より廿九人、天満五丁目笠屋興十郎が十七人、玉造の八内三十六人、合百二十人つれて参りけるをみれば、皆六十よりうへの世界みじかき婆々共なり、役人あきれて、かやうの古き化ぞこなひは、何の為に来りけるぞと無興ある時、肝煎共罷り出、いづれもお望みの絵図に合せましてと取出すをみれば、一代男の絵師がかける女姿也、この話の概要を簡潔に述べると、主人公である色盛は、京都に妾が多かったが、まだ子供がいなかったので、大坂で美人を探そうとして、絵師に三都における理想の女性の姿を描かせ、後日屋敷で女性を見ることにしたが、連れて来られた一二〇人

の女性を見ると、皆六〇歳以上の老女であり、使いの者が呆れると、斡旋人が「どれもお望みの絵の通りの女性です」と言いながら取り出したのは、『好色一代男』の絵師が描いた絵であったというものである。これはあくまで小説だが、この話から、『好色一代男』の挿絵を描いた人物について、以下のようなことが推測できる。

まず、『寛潤平家物語』は、井原西鶴が没した元禄六年（一六九三年）の一七年後である宝永七年（一七一〇年）に刊行された作品だが、本文中に「好色一代男の絵は何もの、筆なりけん」とあるように、その当時からすでに、『好色一代男』の挿絵を描いた人物の本名は不明であったということがわかる。もし、『好色一代男』が井原西鶴画であった場合、当時からそのことが知られていなかったというのは少し疑問である。

また、先行研究では指摘されていないが、本文中に「好色一代男の絵は何もの、筆なりけん」としながらも、「大坂の正甫は鶉一疋銀一枚にさだめて、かくれなき名をとりぬれ共、上手に二代なかりけり」と、江戸時代前期の大坂の絵師であり、鶉の絵を得意とした北峯正甫の名が挙げられていることから、その子がこの絵師の候補として考えられる。『寛潤平家物語』によると、「此たびは大坂にて見たて役人くんだり、姿絵を絵師にあつらへけるに」とあるように、『好色一代男』の挿絵は、大坂の絵師によつて描かれたとされているが、北峯正甫は大坂の絵師であることや、【表一】に記載した、現在、井原西鶴画とされている作品には俳諧書や井原西鶴の作品が多いが、北峯正甫は俳人でもあり、井原西鶴と同じ西山宗因の門人であったこ

となども共通している。ちなみに、信多純一氏の『好色一代男の研究』『好色一代男』絵影響作』でも、井原西鶴画とされている挿絵を描いた絵師については、「彼は西鶴に近い立場の人で、或いは俳諧仲間でもあったらうか。」と推測されている。

また、北峯正甫については、元禄一〇年（一六九七年）刊の、全国の地誌である『国花万葉記』第六卷「撰津国」に「絵師谷町 北峯正甫」とあるが、【表一】に記載した、現在、井原西鶴画とされている作品を刊行した書肆の場所は、いずれも現在の大阪府大阪市北区・中央区周辺であり、北峯正甫の店があった現在の大阪府大阪市中央区谷町とは半径五キロメートル以内の距離である。よって、地理的にも、北峯正甫の子が、それらの作品の挿絵を描いていたと考えても不自然ではない。

以上のことから、現在、井原西鶴画とされている作品は、北峯正甫の子などの、大坂の専門絵師画であった可能性があると、いうことを指摘したい。

六、おわりに

最後に、改めて今回の結論を述べると、以下の通りである。まず、一つ目に、蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるという先行研究は誤りであり、『人倫訓蒙図彙』の刊記に、京都の書肆の名前があることから、京都の絵師であったということが考えられる。二つ目に、これまで蒔絵師源三郎画とされてきた作品は四五作品あるが、『人倫訓蒙図彙』以外に、蒔絵師源三郎の署名がある作品はなく、水谷不倒氏が、私見では吉田半兵衛画を蒔絵師源三郎画であるとしたこともあり、蒔絵師源

三郎画であると考えられる挿絵が描かれている作品もなかったことから、現在、蒔絵師源三郎画であると考えられる作品は『人倫訓蒙図彙』のみであるといえる。三つ目に、蒔絵師源三郎は、吉田半兵衛と同じく、『好色一代男』などの、井原西鶴の作品の挿絵を描いていたとする先行研究は誤りであり、先行研究において蒔絵師源三郎画であるとされていた作品には、現在、井原西鶴画であるとされている作品と同じ画風の挿絵が描かれているものがあるが、それらは井原西鶴画ではなく、北峯正甫の子などの、大坂の専門絵師画であったという可能性がある。

今後、江戸時代前期の絵師および、現在、井原西鶴画とされている作品について、より具体的に明らかにしていきたい。

【表一】井原西鶴画とされている作品一覧表

刊行年	刊行月	作品名	分類	作・編者名	本文の筆跡	書肆
延宝元年（一六七三年）	一〇月	『哥仙大坂俳諧師』	俳諧	井原西鶴	A系統	刊記なし
延宝九年（一六八一年）	三月	『山海集』	俳諧	紅葉庵賀子	B系統	大坂天神橋筋御藏前 板木屋 伊右衛門
天和二年（一六八二年）	一月	『俳諧百人一句難波色紙』	俳諧	土橋春林	井原西鶴	大坂伏見呉服町書林 深江屋太郎兵衛板
	四月	『高名集』	俳諧	梅林軒風黒	C系統	大坂伏見呉服町書林 深江屋太郎兵衛板
	四月	『三箇津』	俳諧	松水軒如扶	D系統	大坂呉服町書林 深江屋太郎兵衛板行
	一〇月	『好色一代男』	浮世草子	井原西鶴	E系統	大坂思案橋荒砥屋 孫兵衛可心板
貞享元年（一六八四年）	一〇月	『俳諧女歌仙』	俳諧	井原西鶴	井原西鶴	大坂南本町堺筋河内屋 市左衛門板
貞享二年（一六八五年）	不明	『諸艶大鑑』	浮世草子	井原西鶴	井原西鶴	大坂呉服町真齋橋筋角 書林 池田屋三良右衛門板
貞享三年（一六八六年）	一月	『西鶴諸国はなし』	浮世草子	井原西鶴	井原西鶴	大坂伏見呉服町真齋橋筋角 池田屋三良右衛門開板
	一月	『近代艶隠者』	浮世草子	西鷲軒橋泉	井原西鶴	摂陽順慶町心齋橋筋角 河内屋善兵衛刊
貞享四年（一六八七年）	一月	『本朝列仙伝』	伝記	田中玄順	F系統	江戸青物町 万屋清兵衛・大坂呉服町心齋橋筋角池田屋 書林 岡田三郎右衛門 板行
元禄四年（一六九一年）	五月	『絵入西行撰集抄』	説話	作者不明	G系統	摂城書林 河内屋善兵衛
〔天和三年（一六八三年）〕	八月	『俳諧石草』	俳諧	松魂軒（井原西鶴）	井原西鶴	京城 上村平左衛門・江府 万屋清兵衛・大坂寿善堂
〔元禄四年（一六九一年）〕	〔二月〕	『難波の只は伊勢の白粉』	評判記	井原西鶴	H系統	刊記なし
〔元禄四年（一六九一年）〕	〔二月〕	『枕久二世の物語』	浮世草子	作者不明	I系統	刊記に記載なし

【表二】『好色一代男』における本文と挿絵の内容の違い

巻数	話数	本文と挿絵の内容の違い (井原西鶴 画)	本文と挿絵の内容の違い (菱川師宣画)
第一巻	第七話「別れは当座ばらひ」 第二話「髪きりても捨てられぬ世」	梅に鶯の屏風ではなく菊の襖である。 炬燵の上に猫がいる。	屏風だが真名の散らし書きである。
第二巻	第三話「女はおもはくの外」 第四話「誓紙のうるし判」	女性が木の棒で世之助の眉間ではなく後頭部を打っている。 世之介たちがいるのが揚屋内ではなく屋外である。	女性が木の棒で世之助の眉間ではなく前頭部を打っている。 世之介たちがいるのが揚屋内ではなく屋外である。 比丘尼の一人が黒頭巾ではない。
第三巻	第六話「木綿布子もかりの世」	女性の楓の妖怪が出てきた場所が庭ではなく二階である。大綱の妖怪に羽が生えており、出てきた場所が空ではなく室内である。	女性の楓の妖怪が出てきた場所が庭ではなく二階である。
第四巻	第三話「夢の太刀風」 第四話「替った物は男傾城」	世之助は浄瑠璃を観ていないのに浄瑠璃の舞台が描かれている。 扇屋が扇を売りに来るのではなく世之助が扇屋に行っている。	扇屋が扇を売りに来るのではなく世之助が扇屋に行っている。
第五巻	第六話「目に三月」 第五話「一日かして何程が物ぞ」	本文にはない遊女が禿から手紙を受け取る姿が描かれている。世之助の瞿麦紋の羽織を着ているのが遊女である。 世之助の羽織が花色(薄い藍色)ではない。	
第六巻	第六話「当流の男を見しらぬ」 第三話「心中箱」	世之助が二階にいる。	琴の糸ではなく縄に女性の髪が吊るされている。 世之助が二階にいる。
第七巻	第四話「寝覚の菜好み」 第二話「末社らく遊び」	世之助が二階にいる。 本文にはない遊女二人が座って涼んでいる様子が描かれている。	本文にはない遊女二人が座っている様子が描かれている。
第八巻	第四話「さす盃は百二十里」 第五話「諸分の日帳」 第一話「らく寝の車」	太夫の付き人の着物が紅葉紋ではない。 世之助が読んでいたはずの太夫の日記がない。 車一両に四人のはずが三人しか乗っていない。	

注

- (1) 宝永六年(一七〇九年)刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おぼえたる富貴草」に、「半兵衛は三年めに寺町通へ出て弟子あまたか、へ」とあり、これは吉田半兵衛のことであるとされている。
- (2) 水谷不倒『古版小説挿画史』(大岡山書店 一九三五年 一三〇頁)「吉田半兵衛」項に、「東にあつては、師宣以降、古山師重・鳥居清信・奥村政信等の輩出した如く、西にあつても、半兵衛について、蒔絵師源三郎・大森善清・川島叙清等が続出した。」とある。
- (3) 水谷不倒『古版小説挿画史』「吉田半兵衛」項を参照。
- (4) 『新井白石全集』第五巻(国書刊行会 一九〇六年 五七二頁)所収。
- (5) 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五巻(岩波書店 一九八四年 五〇九頁)「蒔絵師源三郎」項に、「新井白石著『退私録』中の南都に塗師屋源三郎という者がいたという記事より、奈良の人と考えられる。」とある。
- (6) 千宗室『茶道古典全集』第九巻(淡交新社 一九五七年)を参照。
- (7) 塙保己一『続群書類従』第一九輯下 遊戯部・飲食部(続群書類従完成会 一九八八年 四〇八頁)所収。
- (8) 正しくは「一二の巻二冊と三四五六七の巻五冊」である。
- (9) 私見では、署名がない本よりも署名がある本の方が版木が摩耗しているのの後刷であり、署名は新しく追加されたものであると考えられる。
- (10) 朝倉無声『新修日本小説年表』(春陽堂 一九二六年 五七頁)に「〇好色十二人男 五 舎衣軒・蒔絵師源三郎画 同(元禄八年)」とある。
- (11) 漆山又四郎氏の号。
- (12) 『諸艶大鑑』の別名。
- (13) 大田南畝『浮世絵類考』(岩波書店 一九四一年 五三頁)所収。
- (14) 『万買物調方記』の別名。
- (15) 蒔絵師源三郎についての記述がある主な書籍やデータベースは、柳亭種彦『好色本目録』(『新群書類従』第七巻 国書刊行会 一九〇六年)、「此花」第四枝(雅俗文庫 一九一〇年)、漆山又四郎芸苑叢書 第一期『浮世絵年表』(風俗絵巻図画刊行会 一九二〇年)、水谷不倒『浮世草子 西鶴本』(水谷文庫 一九二〇年)、稀書複製会『版画礼讃』(春陽堂 一九二五年)、井上和雄『浮世絵師伝』(渡辺版画店 一九三一年)、米山堂『近世文芸名著標本集』(米山堂 一九三三・一九三五年)、漆山又四郎『新撰浮世絵年表』(奎光書院 一九三四年)、水谷不倒『古版小説挿画史』、大村西崖『近世風俗画史』(宝雲舎 一九四三年)、山崎寛 書誌書目シリィズ⑥『改訂日本小説書目年表』(ゆまに書房 一九七七年)、漆山又四郎 日本書誌学大系34(1)『絵本年表』 第一巻(青雲堂書店 一九八三年)、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五巻、『浮世草子大事典』編集委員会『江戸時代の社会・風俗がわかる 浮世草子大事典』(笠間書院 二〇一七年)、新日本古典籍総合データベース、西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースであり、これらを調査対象とした。
- (16) 古典文庫第六〇四冊『好色文伝授・好色錦木』(古典文庫 一九九七年 四五七頁)を参照。
- (17) 『人倫訓蒙図彙』第三巻「第七巻の挿絵を参照」。
- (18) 正しくは、漆山又四郎 日本書誌学大系34(1)『絵本年表』第一巻のこと。
- (19) 水谷不倒『浮世草子 西鶴本』(二八頁)上巻「(五) 西鶴本の挿絵に就て」に、「西鶴の遺墨中画讀のものが往々ある。之を見ると、西鶴は素人ながら土佐風の絵に巧みであった事がわかる。」とある。
- (20) 例えば、延宝七年(一六七九年)に制作された「世継翁画賛」には、本文に「西鶴」という署名があるが、その絵には井原西鶴画であるという署名はない。ただし、延宝七年(一六七九年)に成立した「西鶴書簡 下里勘兵衛宛」に、「自筆の翁一ふく進上申候御聞可被下候紙に少され御座候而きりぬき申候上手細工に仕申候は見え

中ましく候」とあることから、天理大学附属天理図書館 新天理善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（天理大学出版部 二〇一〇年）などでは、「世継翁画賛」は、井原西鶴画であるという証拠がある唯一の画賛であると考えられている。しかし、井原西鶴の画賛はそれぞれに画風が異なるので、もし「世継翁画賛」が井原西鶴画であった場合でも、他の画賛についても井原西鶴画であるとはいえないのではないかと筆者は考える。

(21) 岸得藏「挿絵から見た西鶴文学の二性格」『近世文藝』第二号

（日本近世文学会 一九五五年一〇月 一頁）には、「自註百韻」の絵が直接彼（筆者注・井原西鶴のこと）の手に成つたとは私は素直に信じ難い。しかしそれらは今問わない。」とあり、野間光辰『西鶴』解説（天理図書館 一九六五年 九六頁）には、「本巻（筆者注・『西鶴独吟百韻自註絵巻』のこと）は従来西鶴画とされてゐるが、その技法の余りにも優れてゐる所から、西鶴画たることを疑ふ説もある。確かに画中人物の姿態・顔貌に、他の西鶴筆の画中の人物と相通するものがあり、その特色を示してゐる。（中略）（『西鶴独吟百韻自註絵巻』の）文字の筆者と画家は必ずしも同一人たるを要しない。むしろ別人たることを思はせるものがあり、西鶴画の疑はれる理由も大いに存するわけである。」とあり、頼原退藏・暉峻康隆・野間光辰『定本西鶴全集』第二巻（中央公論社 一九七〇年 二九頁）には、「（『西鶴独吟百韻自註絵巻』）には、藤井乙男氏による「松寿軒西鶴書画俳諧百韻」という題簽があるが、本巻は、百韻自註の部分と絵の部分は別々に執筆せられ、後に卷子として仕立てられた形跡が歴然として残つてゐる。従来本巻は西鶴の自画自筆に成るものと信じられてゐたが、もし文字も絵も西鶴の一筆であるとするれば、その製作の過程にいささか疑問を抱かざるを得ない。何となれば、本巻の姿からいへば、文字の筆者と画の書き手とは必ずしも同一人たることを要しないからである。しかしまた、画中人物の姿態・顔貌等、他の西鶴画作のそれと相通するものがあつて、速かに西鶴画でないとも決することは出来ない。藤井博士が「西鶴書画」の四字を排して、わざわざ「自註絵巻」の四字を

選ばれた真意も、或はその辺にあつたのではなかつたかと思はれる。画は確かに俳画と趣を異にする町狩野の風であるが、西鶴の画については猶今後の研究に俟ちたい。」とある。一方、現在では、

佐上圭太「やまとの名品44 西鶴独吟百韻自註絵巻 西鶴自筆」

『陽気』第七三六号（養徳社 二〇一〇年八月 三―四頁）には、

「従来、挿絵も西鶴画とされていたが、極彩色であまりに精緻な筆さばきは、狩野派の町絵師が描いた可能性が高い。」とあり、天理

大学附属天理図書館 新天理図書館善本叢書 第三三卷『西鶴自筆本集』（解題 一〇頁）には、「（『西鶴独吟百韻自註絵巻』）は挿画

を「伝西鶴画」とするが、精密な描写や色遣いなどから専門絵師の手になると考えられている。」とある。

(22) 『近世文芸叢書』第七卷（国書刊行会 一九二一年 三六三―三六四頁）所収。

(23) 星野錫『美術画報』二三編第五卷（画報社 一九〇八年六月 一

一頁）に北峯正甫画の「菊に鶉図」が紹介されている。

(24) 延宝元年（一六七三年）刊『哥仙大坂俳諧師』は、江戸時代前期の大坂の俳人である西山宗因の門人三六人を紹介した俳諧書であり、北峯正甫も入集している。

（いしだ・れいな）